コロナ後の教育と研修団体の存在意義

支部長　田中和徳（６０）城内小学校

南魚沼市では、夏季休業前～中の教職員へのワクチン接種が行われることになった。市教育委員会の調整に敬意を表したい。

コロナ禍により、教育界から懇親会等の酒席が消えて久しい。家庭での生活時間が増加したことは良いことだが、職場での人間関係のすれ違い等が出ているという話しは気になることである。

コロナ禍のおかげで、これまでなかなか手をつけられなかった行事や教育活動のあり方を大胆に改革できたことは意義があった。また、各種研修会や県等が主催する会議がオンライン形式になるなど、時間と旅費を節約できる効果があった。

それでは、ときわ会の活動はどうなるのだろうか？本年度ときわ会は、活動の重点１として「学校教育を取り巻く環境の変化を前向きにとらえ、新しい時代の教育の創造を目指す研修の充実」を掲げ、様々な課題が山積する中で、学校の常識を疑い、教育の本質を見極め、新しい時代の教育を創り出そうとしている。

吉田会長は、このコロナ禍の中でも前進するときわ会であって欲しいと願っている。オンラインのよさ、対面のよさ、双方のデメリットを補完しあいながら、今後は併用する研修になっていくものと思われるが、私個人的には、対面で、人の息づかいや微妙な心の動きを感じ取りながら協議していくことがベストと考える。このコロナ禍で、思うような会合や研修が開催できず、当会の「相互に錬磨する者の集い」の意義が問われる１年であったことは確かである。コロナ禍の出口が見えてきた中で、対面での研修会や親睦会が不自由なく実施され、会員相互の絆が深まっていくことを強く願うこの頃である。